

2019. 6. 6 (木)

他者の「好き」に興味を拓けよう

大岡 栄美

浅い知識のススメ

きょうは忙しい中、チャペルに足を運んでくださってありがとうございます。6月に入り、入学後の皆さんの慌ただしさもちょうど一段落したのではないのでしょうか。前期試験に向けて多忙な時期に入る前に、落ち着いて過ごせるいい時期になりました。

6月のチャペルのテーマは「大学での学び」ということで、きょうは今の落ち着いた時期だからこそ、皆さんが大学生活での目標や過ごし方について再確認できるようなお話になればとても嬉しく思います。言われなくてもわかっているというお話になってしまうかもしれないとは思いつつ、お伝えしていければと思います。

きょう私が皆さんにお伝えしたいのは、浅い知識、ちょっとした雑学を増やすことの大切さについてです。真面目な深い知識ではなくて、ちょっとした知識の持つ力というお話です。テレビを見たり、本を読んだり、SNS といった方法を通じて雑学を身につけるということではありません。その分野をものでごく好きな他者と知り合うことを通じて、その関わりから自分の知らない世界に触れ、ちょっとした知識を増やして自分の世界を広げてみようというお話です。

大学での学びという今月のテーマに関連して、将来のキャリアにつながる、自分の専門性を高めることにつながる話を聞けると期待してくれていたかもしれませんが、それももちろん非常に大切な「大学での学び」です。しかし、そういう話はまた別の機会にどこかで聞く機会もあると思います。きょうは違う角度から浅い知識をなぜ勧めたいのかというお話をしていきたいと思います。

友人関係の同質化

私は現在社会学入門の授業を1年生向けに担当させていただいています。皆さんの中にはすでに私の講義を受けたという人もいるのではないかと思います。「人間関係」についての講義で、2015年の調査の知見として、特に若者が友人を選ぶ際に、自分と非常に同質な他者を選ぶ傾向が出ているという調査結果を紹介しました。同質な他者とはどういうことかと言いますと、男性であれば男性、女性であれば女性、若者であれば自分と同世代の若者を友人として選ぶ傾向が強まっているのです。

今、私たちは昔に比べて友人関係をより自由に選ぶ選択肢が高まった時代に生きています。そのためいろいろな人と出会って、より

多様な人と友人になる可能性が高まるのではないかという期待がありました。しかし調査結果は期待に反して同質な友人を選ぶ傾向が強まっているというものでした。

わかりやすく紹介しますと、例えば異性の友人がいる若者の割合が1990年代の前半は48%ぐらいありました。しかし、この20年ほどで半分に減り、20%後半ぐらいの人しか異性の友人がいないという回答になっていました。皆さんはどうでしょう。大学に入学以降、この2カ月の間で新しく友人が増えたという人もたくさんいると思います。しかし男子学生だったら新しい友人は男子ばかりだった、女子学生だったら女子ばかりだったというような同質化の傾向を自分もなぞっているということはないでしょうか。

授業の中では、このような同質化傾向を「内閉」という言葉で紹介しました。皆さんからのコメントでは「自分と同質的な人と仲良くなることは駄目なのではないか」というような質問を受けたりしました。皆さんどのように考えますか。

その答えを言う前に、自己紹介などで使われるコミュニケーションツールで「偏愛マップ」というものがあるので紹介したいと思います。皆さん偏愛マップについて聞いたことがありますか？またはサークルの自己紹介で同じようなことをした人はいますか？これは20年ほど前に「声に出して読みたい日本語」という本がベストセラーになったのですが、その著者の明治大学の齊藤孝先生が紹介した自己紹介ツールになります。

偏って愛すると書いてあるところからわかるように、ちょっと好きということではなくて、ある意味マニアックに愛しているものをあまり親しくない人にさらけ出すという少

し苦行的な意味合いがあります。自分の偏った好きを1枚の紙にマッピングして、その紙を初対面の人同士で交換し合います。その中のお互いに好きなもの、それとわりとマニアックに好きな部分の重なり合いをきっかけにして、お互いの仲を深めることを目的としたコミュニケーションツールになります。

偏愛マップは私もゼミの自己紹介で使ったことがあるのですが、効果は絶大です。自分がとても好きだけれども、あまり周りに同じような趣味を持っているような人がいない場合も多いです。そのため好みが一致すると、仲間を見つけれられたという効果で距離感は一気に縮まります。マニアックなバンドの場合もあれば、映画監督の場合もあります。

この偏愛マップの例からもわかるように、自分と似たような好みや趣味、価値観を持っている人と仲良くなるというのは実は非常に自然なことで、社会心理学の用語では同類原理（ホモフィリー）と言います。特に自分と似ている、同質的な友人との関係というものは心理的な安定性をもたらすと言われていきます。先ほど紹介したように友人の同質化傾向が強まっているという研究結果が出ていますが、それはむしろ自然なことなのです。

私たちは社会の変化が非常に激しく、流動性が高まっている時代に生きています。そのため、自分がどこに所属しているのか、自分の居場所はどこなのかということを定めるのが非常に難しくなっています。自分にとって居心地のよい、自分のホームと感じられるような同質的な人間関係を求める意識は、むしろ流動性が高まり不安定な時代を生き抜くサバイバル戦略の結果なのではないでしょうか。つまり、同質的な人と仲良くすること自体は特に否定することではありません。

多様なかわりの必要性

他方社会というものはさまざまな価値観を持つ多様な他者によって構成されています。私たちの人生の選択肢、個人の選択肢というのは今非常に多様化しています。それぞれ大切にしている価値観やそのことと関連したライフスタイルがまったく異なる人々が地域社会の中で暮らし、ときには組織の中で協力して1つの目的のために働くことが求められます。

私が専門としているネットワーク論やソーシャルキャピタル論では、頻繁に会い、自分にとって大切な相談ごとをするような関係性を指して、強い絆、強い紐帯というような言い方をします。ところで強い紐帯で結ばれた関係が過度に同質的になりすぎると、自分に入ってくる情報量や内容が非常に限定的になってしまうこと、その結果、自分が理解できないと自分で決めつけてしまった相手への寛容さというものが失われるということが指摘されています。

わかりやすい例で言いますと、恋愛相談をするときに、例えば女性が自分の同年代の女性にばかり相談する場合と、異性や人生の先輩も含めた幅の広い年齢の相手に相談した場合には与えられるアドバイスが変わってきます。相手の立場に立つというのは思ったほど簡単なことではありません。過度に同質的な関係性に埋め込まれていると、自分に似た価値観に基づく意見ばかりが集まり、自分の視野が狭くなってしまおうというリスクがあるのです。

そういう意味ばかりで、自分にとってのホームとなる同質的な関係性をベースにしつつも、他者への理解、多様性に対しての寛容

さにつながるような異質な関係性への広がりというものもオープンにしておくということが私たちには求められていると言えます。

ただ、そうは言いましても、自分とは趣味や好みや価値観が違う人と強い関係で結ばれた深い友人になれと言われても、それはなかなかハードルの高いことです。例えば先ほどの偏愛マップでも、共通点が重なれば盛り上がりが一気に距離が縮まります。しかし共通点にならなかったものに関しては、ほとんどの人がスルーします。あまり触れずに距離を取るという感じで、その話題には踏み込まない選択肢を選ぶかと思います。

しかしながら、他人の興味がある趣味、あるいは好みの分野を「自分も好き」になるところまではいかなくても、スルーせず何らかのちょっとした知識を仕入れておくことはできるのではないかと思います。そしてそれを自分の引き出しにしまっておくのです。すると、あるときそのことについてすごく好きな人との出会いがあったときには、自分の引き出しの中からその共通性カードを切って関係性を近づけることに使うことができるのです。コミュニケーションツールとして、その浅い知識を装備することが可能になります。

共通項の引き出し

もう3ヵ月ほど前になるとと思いますが、今年、NHKで「特撮ガガガ」という漫画を原作にするドラマが実写化されました。これは「特撮」とについていることからわかるように、戦隊ヒーローにはまっているオタクOLが社会人として生活する中で直面する葛藤について描いた丹波庭さん原作の漫画で

す。

その漫画の中にこういうエピソードがありました。主人公がカラオケに誘われます。絶対にそういう場に出かけて行きたくないと思っている主人公なのですが、断る理由が考えつかず、流されてカラオケに参加してしまうこととなります。普段は自分の趣味の特撮ヒーローものの主題歌ばかりを一人カラオケで5時間ぐらい歌っているという主人公のため、会社の同僚との懇親の場で歌う歌がないということに陥ります。そしてその中で「こんなことになるなら一般的な歌をたしなんでおけばよかった」と激しく動揺するシーンがあります。

何が一般的なのかという基準は議論が分かれる部分ではありますが。しかし今日お話ししているテーマに即して言えば、他人との共通項になり得るような歌を知識として装備しておけばよかったということにも置き換えられるのではないのでしょうか。

もちろん自分の趣味を極め、好みを突き詰めること、また好きを共有できる仲間との時間は自分を生き生きとさせてくれる素敵な時間です。しかし同時にその世界の中だけで生きていけない現実というものもあります。そのため、自分の好きの周辺部分となる広い分野に関しても浅い知識を持っておく、あるいは他人との共通項になるような引き出しを増やして、いろいろな人とのコミュニケーションを広げる入口を準備しておくことはとても大切なのではないのでしょうか。

「特撮ガガガ」の主人公の例は、「そんなに器用にできないからオタク女子なのだ」という部分はもちろんあります。また例がカラオケなので、歌を歌えるようになるのは浅い知識よりもさらにレベルアップした知識が必要

という難しさは確かにあります。

しかしこういった例を紹介しながら、きょう皆さんにお伝えしたかったのは、まったく興味、関心がないということで自分の中に情報が入るのを遮断してしまって、知識ゼロにしてしまうのではなくて、ちょっとしたこと、例えばスポーツであれば好きな選手の名前とかルールなど、たいして役にも立たない浅い知識を自分が身につけておくと、意外なところで人とつながる上での共通項の引き出しを増やすことができるのではないかということです。

例えば関西学院大学ではアメリカンフットボールチームが非常に強いです。新入生には「Let's Go to スタジアム」という試合を見に行くためのチケットが配られます。行ってみた人もいれば、ルールもわからないし興味ないと言ってチケットを捨ててしまう人もいたでしょう。私自身もこの関西学院に着任するまでアメフトには興味はありませんでした。しかしゼミ生にアメフト部の学生がいて、そこから「どういっきっかけでアメフトをやるようになったのか」、「○○という漫画です」というようなことを聞いて、ルールを少し学んだり、競合チームのことを教えてもらったりしました。

実は関学OBの中には、関学愛が強くて、アメフトの応援のために甲子園ボウルに来られる方たくさんいます。また仕事関係でも関学と言えばアメフトですねというような切り口で話が始まるのが意外に多くあります。そういうときに知識がゼロと学生から教えてもらって少し知っている場合では、話題の広がり方が全然違います。知識のなさ、共通性のなさというものをコミュニケーションにおける境界にしてしまうことなく、つながれる

機会が増えていくのです。

大学での出会いを拡げよう

実は私が専門にしているソーシャルキャピタル論でも、多様な社会関係を持っている人はより文化的な知識や好みも多様であり、また逆も成り立つという相関関係があるということがわかっています。他者の好きなものに興味を持ち、かかわりから浅い知識を増やしていくのは、自分自身の好奇心と心のオープンさが必要とされる、ある意味もしかしたら勉強より難しい部分かもしれません。

もちろん年を重ねてすてきなこともたくさんあります。しかし私たちは年を重ねると、なかなか自分の決まった範囲からはみ出して失敗する、試すということが難しい状況に置かれるようになります。例えば自分の好きなタイプの映画はこれ、自分の好きな作家はこれというふうに関心の範囲が狭まってきます。どんどん自分のキャリアが上がるにつれ忙しさも増すので、自分に使うことのできる時間が限られる中で失敗を避けるようにな

ります。

大学時代は忙しいとはいえ、まだまだ自分のために使うことのできる時間も、試してみる時間も無尽蔵です。そういう意味でぜひ大学で専門的な学びを深めていくことはもちろん、いろいろな人と出会い、多様な人からそれぞれの人が大切にしている、その愛すべき世界を学んでほしいと思います。

もちろんそのすべてに興味や関心を深く持つことはできませんし、持つ必要もないです。ただ少なくとも食わず嫌いというものを減らして、聞きかじりでもいいので何らかの知識を増やしておく、自分の中に多様な引き出しが増えて、いつの間にかより多様な人とつながれるきっかけを貯金することができるのではないかと思います。

ぜひ SNS やインターネットからだけではなく、人を通じて学べる知識を増やす経験も大学生活の中で大切にしていだけたらと思います。きょうの私からのメッセージは以上です。ありがとうございました。

(社会学部准教授)